



研究部HP 版

第2版 教育研究部 令和2年2月発行

(文責:細井)

～ 自立とプロンプト ～

1 「プロンプト」とは

ここでいう「プロンプト」とは、「行動が生じるように、手伝ったり、手助けしたりすること」であり、私たちが日常、子どもたちに行っている「手助け」のことです。

プロンプトにはいくつかの種類があります。例として、新しく「山」という漢字を書くことを教える場面で説明します。児童生徒の手をとって一緒に字を書いた場合、これは「**身体プロンプト**」といいます。言葉で筆順等を教える場合、これは「**言語プロンプト**」といいます。空中に山という字を指で書いて見せた場合、これは「**身振りプロンプト**」といいます。山という字の筆順を写真や動画で見せた場合、これは「**視覚プロンプト**」といいます。以上が主なプロンプトとなります。

2 「プロンプト依存」に注意

前回の「スクールバスが学校に到着したのに下車しようとしない」「起立と言われても立たない」は、「下車準備」や「起立」という行動が生じていないので、生じるように手伝いや手助け、すなわち「プロンプト」が必要となります。この時にどのプロンプトを用いるかは、子どもの実態を踏まえて選択することになります。言語指示の理解が十分な子どもであれば「言語プロンプト」、視覚優位な子どもであれば「視覚プロンプト」ということになると思います。



実際にプロンプトをしていくに当たって大事なことは、「プロンプトをいかに減らし（抜き）ていくか」ということを最初から考えておくことです。「自立とは合図に正しく反応すること」と前回書きましたが、その考えに基づくのであれば、行動が生じたとしてもそこにプロンプトがある限りは、合図に正しく反応したことにはならず、したがって自立できていないということになります。ですから、どのプロンプトを用いるかを考えると共に、どのようにしてプロンプトを減らし（抜き）ていくかを最初から計画しておくことが大事である、と応用行動分析に詳しい先生はおっしゃっています。

もう一つ注意しておかなければならないこととして「プロンプト依存」というものがあります。言葉のとおり、プロンプトがなければ行動が生じない状態のことをさしますが、用いるプロンプトによって依存になりやすいものがあるそうです。そのプロンプトとは「言語プロンプト」だそうで

す。「指示待ち」という言葉を聞いたことがあると思いますが、そのような状態になっている場合の多くは「言語プロンプト依存」になっているそうです。逆に一番抜きやすいプロンプトは「身体プロンプト」で、「視覚プロンプト」も抜きやすいそうです。

体育館での体育の授業が終わり、教室に戻ることは分かっているのに、いつまでも移動しようとせず、先生から「教室にもどるよ」と言葉かけをされてからようやく移動を開始する。すでに何回も行っていて作業の流れは理解できている作業学習において、「できました」と先生に報告はできるものの、次の用意を行おうとせず、先生から「次の用意してね」と言葉かけされてから用意を始める。先生が「掃除を始めます」といったのに、たったまま動かず、「机といすをさげてね」と先生に言葉かけをされてから机といすをさげ始める。このような状態が「言語プロンプト依存」の状態といえると思います。

そして、応用行動分析に詳しい先生のお話しによると、「プロンプト依存は障害のせいではなく、指導する際の計画自体に問題があるため」だそうです。つまり、関わる大人の対応によってプロンプト依存になってしまうということです。



3 自立に向けて

では、前回の最後の記載した「スクールバスが学校に到着したのに下車しようとししない」「起立と言われてもたたない」時にどのようなプロンプトが考えられるでしょうか。

まずはバスが学校に着いたことを知ってもらうために、「学校に着きました」と言葉かけを合図にすることが考えられます。

自分で到着したことを理解できるようにするのならば、指導者が校舎を指差しし見るように促す（身振りプロンプト）、または子どもが校舎の方へ顔を向けるように指導者が手で頭の向きを動かしてあげる（身体プロンプト）ことなどが考えられます。少しずつ顔を向けることができはじめてきたら、指差しの時間を徐々に短くする、顔の向きを返させるために頭に触れている時間を徐々に短くしていくなどでプロンプトを抜いていきます。【次月発行第3版に続く】

参考：PECS トレーニングマニュアル第2版

カット：Pics for PECS 第15版（掲載許諾済み）